
森のぱよぱよ

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森のぱよぱよ

【Nコード】

N2657I

【作者名】

栖坂月

【あらすじ】

大気の主成分にフッ素を含む惑星フローライト、そのとある大陸にある広大な蛍石の森に『ぱよぱよ』と名付けられた奇妙な生物が住んでいた。大した功績を持たない生物学者のサクジ・スミスは、この生き物の奇妙な魅力に惹かれてフローライトでの観察を続けていた。ちなみに彼は42歳、今年がすっかり厄年である。 空想科学祭2009参加作品です

ばよ1 私とばよばよ(前書き)

普段の私の作品に比べると、かなり長めです。三倍くらいはありますか。

疲れたら遠慮せずにお休み下さい。

ばよ1 私とばよ

森に住む彼らを、人は『ばよばよ』と名付けた。

母なる星である地球から最も遠くに位置する開拓惑星フロライト、その名が示す通りフツ素を大気に有し^{ほたるいし}螢石を大量に含有する奇妙な惑星である。地表面の温度が年間平均でおよそ0度であったため、当初は居住の可能性すら模索されていたのだが、大気成分を調査した隊員が肩を落として『毒の惑星だ』という眩きと共に帰還することになったという逸話は、かなり有名な話だ。それによってこの惑星の存在を知った者も少なくはないだろう。

現在、極めて小規模のドーム施設に数十名の人間が滞在しているだけであり、もちろん町や公共施設など皆無に等しい。そのほとんどが私と同じく何かしらの研究者か技術者と言え、その専門知識を利用して足りない公共機関を補っているというのが実情だ。事実私も、このコミュニティに暮らしているペット達の医師としての顔も持ち合わせている。

ちなみに私は獣医ではなく、あくまで生物学者である。とはいえ、誇れるような功績など持ち合わせていない。助手や共同研究者に名を連ねるのが関の山という、あまりにパツとしない男だ。もともとだからこそ、誰も好まないような『ばよばよ』の研究に一步を踏み出せたとと言えるのかもしれない。まだ開拓が始まって五年にも満たない新規惑星、しかも人間にとって生きにくく暮らしにくい環境に存在する謎の生き物である。生物学者として興味の湧く対象でこそあるものの、実際に研究対象とするには二の足を踏む相手だ。このような色物に手を出すのは、少なくとも利口な判断とは言えまい。よほど功を焦ったのだらうと揶揄されるのは必至だ。

「今日も外回りですか？ 精が出ますね、先生」

クリーム色の全身防護型シールドスーツに片足を突っ込んだまま首だけを巡らせると、見知った顔が呆れたような笑みを浮かべてこ

ちらを窺っていた。金髪に大きな碧眼、文字通りの鷲鼻に大きな口と、インパクトの極めて高い顔立ちの男である。彼とは、ついこの間三十路を越えた祝杯を上げたばかりだ。その体軀は隆々としていて毛深く、雄々しいという表現がピッタリだ。本人曰く、もう若くはないとのことだが、すでに四十代に入った私より十歳以上も若い肉体の生気はまさしく眩しいほどに輝いて見える。いや、仮に同じ歳であったとしても、私にあれほどの力強さはなかっただろうが。

「ニコ、先生はやめてくれ」

「お断りします。ウチのミカを助けてくれた恩人であり、かつ理想の先達ですからね。これから先生と呼ばせていただきますよ、センセ」

「私を手本にしたところで、ろくな人生が待っていないと思うがね」
「こんな僻地で楽しそうに仕事ができるなんて、実に素晴らしいことじゃありませんか。ぜひ見習いたいものです」

そう言いつつ彼——ニコ・グレイヤールもシルドスーツに足を突っ込む。ちなみに彼の言う『ミカ』というのはペットの愛犬である柴犬の名前だ。日系に属する私には意外に思えたが、ミカはオスの名前である。

「ニコも仕事かい？」

「もちろんです。僕は先生と違って、外回りがあまり好きではありませんので」

「よく言う」

暇があると私に付いてくるニコの冗談に、口元が持ち上がった。

「先生のところは空調に問題ないですか？」

「特に気にならないが……何かあったのか？」

「息苦しいから調べてくれとか言われまして。何も異常はないと思うんですが、一応は調べないといけませんで。正直、エンジニアではなくドクターの領分だとは思うんですがね」

「まあ、異常無しで安心するなら、安いものだろう」

「ですね。それで仕事が成り立つと思えば、楽でいいです」

ニコはいつでもこんな調子だ。明るく、いつでも前を向いて歩いているイメージがある。私のような人生など歩ませたくはないし、歩むべきでもないだろう。まあ、この辺境に長く留まれば、否応なく似たような人生を歩む結果となるだろうが。

「さて、私はそろそろ行くよ。ニコも頑張つてな」

「行つてらっしゃい。くれぐれもお気を付けて」

慎重な送り言葉に苦笑いが浮かぶ。

酔った勢いとはいえ、余計なことを話すべきではなかったのかもれない。私の名はサクジ・スミス、生物学者でバツイチの独身者である。仕事にばかり没頭する内に、気付けば年齢は四十二を数えていた。すでに他界した信心深い母から、厄年には気を付けろと念を押されたものだ。

もつとも、今以上に悪い状況というのが、私にはあまり想像できないのであるが。

大気はどこか黄ばんで見える。

錯覚と言える側面も含んではいるが、少なくとも空は青くない。緑ではないが、黄色みがかつた空色をしている。そのため地上の大気も、知識の補正からかそんな風に映ることも珍しくはなかった。しかし成分の大半を窒素とフッ素に支配されているフローライトの大気であるのだから、時折そんな風に見えたとしても不思議ではない。そしてこの大気こそ、この奇妙な惑星を構築し、我々の侵入を拒んでいる元凶だ。

フッ素は、我々人間にとって必要な存在であるが、同時に高いレベルの毒性を有する物質でもある。過去、フッ素の毒性に気付かなかった研究者の多くが、その身を犠牲にしたと聞いている。とはいえ、我々にとって必要不可欠な酸素とて、強い毒性を持つことが知られている。過ぎたるは及ばざるが如し、何でも過剰に摂取し過ぎれば毒となるのは自明の理である。フッ素が毒と呼ばれ、酸素がそ

う呼ばれないのは、人間にとってどれほどの重要性を有しているのか、その主観的な発想においてのみであろう。

無論、そうは言っても私とて人間である。この地の大気が都合の悪い存在であることに変わりはない。今背負っている小型の簡易ボンベで四時間、予備を含めても六時間が活動の限界だ。施設に常備されているバギーに搭載された大型の高圧縮ボンベであれば、丸二日まで粘ることも可能だが、そこまでの無茶をする研究者はほとんど——いや、皆無と言っても良い。あのドームに住まう人間達ですら、この大気の中へと足を踏み出す輩など滅多に居ないというのが実情だった。

私としては、そんな彼らを非難するつもりにはなれないものの、やや勿体無いのではないかと思っではいる。ここはまさしく、人間という種にとつての異世界であり、十分に見る価値のある新世界でもあるからだ。手に触れられるほど近くに居ながら、それに接しようとしないうなど、正直言つて臆病としか感じられない。郷に入りては郷に従えという言葉にもあるように、せっかくこの惑星に滞在しているのだから、この風景くらいは存分に楽しんでもらいたいものだ。

ジャリという硬い何かを踏み潰したような音を響かせて、私は立ち止まる。施設を出発して十五分、ようやく目的の場所へと到達したようだ。

目の前に広がるのは青い森、くすんだ青銅や錆びた銅版のような色を中心とした巨木の立ち並ぶ深い森が彼方まで覆っていた。巨木と言ったが、それは厳密に言えば木とは言えず、更に言えば植物とも言い難い。形としては巨大なキノコ、具体的に挙げればエリンギのようであるが、触った感触は硬くザラザラとしており、植物ではなく鉱物という印象である。というのは当然の話で、その部分はすでに役目を終えたフッ化カルシウムの結晶でしかなく、生きているのは上層の表面だけなのだ。その生態は珊瑚に近く、懸命に深紅の葉のような物を伸ばして陽光を浴びる様は、さながらイソギンチャ

クか昆布の群でも見ているようだ。そしてどんどん上へ上へと成長し、陽光を浴びられなくなった部分は死滅して土台となる。更にそれが限界に達すると根元から折れ、この大地を形成していくのだ。この星には大きな地殻変動が見られないせいが高い山もなく、この擬似珊瑚——フローコーラルが大地のほとんどを覆っている。そして、このフローコーラルの森で最も頻繁に見られる生き物と言うのが、ぱよぱよと名付けられたゼリー状の生物だった。

「この辺りのヤツは緑系が多いな」

呟きながら、データを入力していく。同時に音声と画像の記録も進めておいた。時間は限られているのだ。細かな検証は後回しにして、まずはデータの蓄積を優先させる。とはいえ、せっかくぱよぱよの間近にまで足を運んだのだから、それなりに好奇心は満ちして帰りたいものだ。

私はヘルメット周辺に集中している機材の稼働を確認すると、慎重に歩を進めてフローコーラルの陰に近付いていく。かつての経験に鑑みれば、そろそろ手荒い歓迎が飛んでこようという頃合だ。正直、初めての時は情けない悲鳴を上げるほどに驚いたものである。それこそ、食べられるのではないかと真剣に思ったほどだ。もちろん、現在では滑稽なエピソードの一つでしかない。ぱよぱよが相手に張り付くのは興味の印であり、好奇の意思表示でしかなかった。そもそもぱよぱよには、口と呼ばれる器官が存在しない。形状は饅頭ソックリで、大きさは大人が一抱えできる程度、色は青やら緑やら黄色やらと様々だが、そのいずれもが半透明だ。残念ながら目は付いておらず、それが一部では不評だと聞いたことがある。まあ、彼らは人間のために生まれた訳でも存在しているのでもないのだから、余計なお世話だと思っていることだろう。

実際、そんな風に思っていたとしても私は驚かない。こんなことを口にすれば変人だと罵られるかもしれないが、ぱよぱよは見た目とは裏腹にとっても利口な生き物である。一度目の手荒い歓迎は二度目にはなくなり、三度目には親愛を示すように擦り寄ってくるよう

になったのだ。つまり、ある程度の記憶力と学習能力を有していると思われるのである。見た目には大きな単細胞生物としか思えないが、何かしら考えたり憶えたりするような器官が備わっている可能性が高い。しかも、時折身体を細かく震わせて振動を仲間を送っているような素振りも有り、もしかすると意思の疎通も仲間内で行っているのではないかと予測している。実際、今日はそういった反応を確かめたいと思い、こうしていつもとは違う場所へと足を運んだのだ。初めての際は驚くばかりで、思考することも観察することもままならなかった。ある程度ぱよぱよの生態がわかってきた今ならジックリと観察できる筈だ。彼らが私を調べ、憶え、伝える様子が見られれば、これは誰もが驚くような発見となるであろう。

しかし、ぱよぱよは飛びついてこなかった。それどころか、私の到来に対して関心がないかのようにすら見えた。ただ、近付いてくることには気付いたらしく、振動して仲間に何やら伝えている素振りはあった。正直拍子抜けだが、同時に新しい発見でもある。ぱよぱよの反応は地域により、あるいは固体によって違うのかもしれない。性格のような個性が、この丸だけの物体に備わっているとしたら、それは驚くべきメカニズムと言えるだろう。

私は恐る恐る手を伸ばし、鮮やかなエメラルドグリーンを内に宿すぱよぱよを撫でてみる。ピクリと少しだけ驚いたような反応を示したぱよぱよだったが、逃げたり暴れたりすることもなく、大人しく撫でられていた。あるいは、この行為の意味するところまで理解しているのではないかと、そんな風にすら思わせる反応だ。

もちもちとして、同時にすべすべとした表面が心地良い。この時の私は、ぱよぱよという生き物の発するゆったりとした、穏やかで可愛げな気性がたくさんの人間達に伝われば良いと、ただ純粹に願っていた。

ばよ2 蜚石とばよ

グラビティシャトル

四機常設されている重力推進連絡船の一つが、派手な機械音とともに固定される。通路の接続と内部エリアの確保が終了するまでに五分ほどかかってから、ドーム内に久しぶりの賑やかさが訪れた。観光客の大气降下は二週間ぶりとなる。とはいえ、それ以前のスパンに比べたら頻繁と言っても差し支えないような状況かもしれない。「今回は六人だそうですね。ずいぶんと下りてくる客が増えましたね」

隣で待機がてら着陸の見物としやれ込んでいたニコが、若干眉根を寄せて言い放つ。彼としては、面倒な業務を増やしかねない観光客の来襲を望んでいないようだ。

「それだけ、ここも少しずつ認知されつつあるということだろう。喜ばしいことさ。少なくとも、生活の糧が必要な我々大人にとって
はね」

「夢追い人の意見とは、とても思えませんな、センセ」

「私が猥^{ばく}であつたなら、あるいは必要なかつたのかもしれないが、あいにくと人間なのでね」

生活を維持するためにも、ばよの研究を続けるためにも、ある程度の収入は必要になる。私も研究者の端くれとして、それなりに公的な機関からの支援を受けてはいるものの、生活と研究を支えるに十分とはいえない。そのため、別口の収入を得ることは極めて重要な必須事項でもあった。獣医としての仕事もそうだし、彼ら客人を案内する観光ガイドの仕事も、その一つだ。

「今はまだいいですけど、何十人という単位で押しかけられたらたまりませんね」

「まあ、そうになったら業者も考えるだろうさ。儲けに繋がるのなら、投資もされるだろうしな」

無論、あまり観光化が進み過ぎるのは望んでいない。そもそも、

こんな場所を見て楽しいと思うのは、相当な物好きと考えて間違いないだろう。少なくとも今のところ、リピーターは皆無だ。

「あのマスコミ、かなり胡散臭い連中でしたけど、それなりに宣伝効果はあつたんですね？」

「さてな。さすがにそこまではわからんよ」

ただ、観光客があればから、半年前の取材から確実に増えていることだけは疑いようがない。それが自然な流れなのか、それとも何かしら人為的な宣伝効果が働いているのか、確かめる術を持たない我々にとってはどうでも良い話だ。

「そんなことより、今夜の準備は進んでいるのか？」

「バギーは二台とも揃ってますよ。今すぐにも出られます」

参加メンバーが六名なら、一台で十分だ。とはいえ、何かがあるかわからない以上、待機はさせておいて損はない。さすがにニコもその辺りがわかつているのだろう。仕事が早いばかりではない。良く気の回る男でもあった。

「なら、夕飯を済ませたらすぐにも出発できるな。今回も通信室での待機任務、頼むぞ？」

「えー、また留守番なんすか？」

「そうボヤくな。夜の森なんて、いつだって見られるんだから」

ばよばよが本来の姿を見せる夜の森、それが観光の目玉でもある私も何度となく見ているが、この役目を他人に譲りたいと思ったことはない。ニコには悪いが、今回も居残りは決定事項だ。まあ、今度一杯奢ってやることにしよう。

「仕方ないか。僕が同行したところでガイドができるワケじゃないですからね。大人しく端末の前でゲームでもしてることにします」

「おいおい、ちゃんと通信には応答してくれよ？」

「わかつてますって」

ニコの笑顔が心強い。彼がバックアップをしてくれているからこそ、私は安心してガイドに集中出来るのだ。その事実を、いずれ伝える必要があるのかもしれない。

「それじゃあ僕は、もう一度バギーを見てきます」

「あ、二」……」

「はい？」

「あー……いや、いいんだ。また後でな」

「ええ、それじゃ」

人間とは、時に不便だと思う。複雑な感情を有しているからこそ、言えないことや伝えられないことが生ずるものだ。人の繋がりが煩わしいと思えることもあったが、年齢を重ねて改めて、その繋がりを求めている自分に気付く。正直、いつも大きなコミュニティを形成しているばよが、羨ましいと思えることも少なからずあった。彼らに感情があるとして、個性と呼ばれるモノが存在するとして、どうやってあれだけのコミュニティを維持しているのだろうと不思議に思う。今まで、彼ら同士の争いやいざこざなど、見たことは一度としてなかった。

考えてみれば、それは奇妙にも映る。

「今度、その辺りも考慮に入れて観察してみるか」

顎の不精鬚を撫でながら、そんな呟きが漏れた。しかし、今すぐに考えるべきでないことを思い出し、大きく深呼吸をして意識を切り替える。研究は確かに第一だが、生活がままならなくては意味がない。それに、より多くの人に知ってもらうことは、結果的にはばよのためにもなるだろう。

首を巡らせると、窓の外は鮮やかなオレンジに染まっている。

何もかもが違う大地で、それは地球と変わらない、夕焼けの色だった。

このフロアライトにおける観光には、二つのパターンがある。一つはメインでもある惑星外からの観察、もう一つが地上に降り立つての内側からの観察だ。どちらもそれぞれの味わいがあり、観光としての意義に優劣はない。ただ、観光客の絶対数には雲泥の開きがある。

あった。それはもちろん、この惑星の特異性、すなわちフッ素の大气というハードルの高さが関係しているのは言うまでもないことだが、同時にもう一つ、外からの観察における優位性というのも無視のできない理由であろう。地球の放つ鮮やかな青さが、それだけで観光資源としての価値を持つように、この惑星の外観も十分な魅力^{りん}を備えている。その原因が、今我々の目の前でも起こっている『^{こう}燐光』という現象だ。

そもそもこの惑星の名前になっているフローライトというのは鉱石の名前であり、和名を螢石という。この石は、その成分にも因るが蛍光や燐光という現象を有する鉱石としても有名であり、宝飾品としても珍重されてきた。ちなみに蛍光というのは特定の光、例えば紫外線などを浴びた際に発光する現象であり、燐光というのはそれが遅れて、あるいは長く発光する現象である。特に燐光は『光を溜めておく』ような現象にも見え、その輝きは人々の目を惹き付ける元となる。そしてその螢石、フローライトが、この星にはゴロゴロと転がっているのだ。何しろ螢石の主成分はフッ化カルシウム――すなわちフローコールの残骸が材料となるのだから、海以外の大地はほぼ全てがフローライトによって覆われていると言っても過言ではない。成分によっては光るかどうか、光るにしても何色に光るのかが決まるので、大地の全てが光る訳ではないものの、その光景は人の目を釘付けにするには十分過ぎるほどだ。もちろん、これほど大規模かつ広範囲に渡って光を放つ現象である。惑星の外からでも観測することができた。それどころか、むしろ趣のある景色として観光客を集めており、輝く夜景を背景にしたディナーやショーは盛況であると聞いている。その内の幾人かが、興味本位から下りてきているというのが実情であろう。大半は、外からの景色に満足して帰ってしまうのだ。

しかしもちろん、下りてこなければ見られないモノも存在する。それがばよばだ。

「今、皆さんの足元にいる半透明の丸い物体が、ばよばよという生

き物です。ばよばよが人間を襲うことはありませんので、まずは安心して観察を行ってください。ただ、ばよばよも生き物ですから、驚かせたり怖がらせたりすれば急激な反応を見せることもあります。特に今は『食事中』ですので、強く叩いたり持ち上げたりという行為は控えていただくようお願いします」

「食事つて、何を食べているんですか？」

壮年の男性が聞いてくる。当然の疑問であり、適切な質問だ。正直私も、その部分がずっと謎だった。この生き物が何を糧として生きているのか、かなりの期間に渡ってまるでわからなかったのだ。「まだ仮説の域を出ないのですが、このばよばよという生き物は『光』を食べているのではないかと考えられています。それもただの光ではなく、蛍石の燐光を食べているのではないかと思われれます。良くご覧になっていただければわかるかと思いますが、点在するばよばよの下はどれも例外なく燐光を発しています。そこからエネルギーを吸収する何かしらの器官を備えているのではないかと、我々は考えているのです」

この説は三ヶ月ほど前に思い当たり、現状で最も有力な説として認定されている。もっとも、こんな生物のことを調べているのは私の他に何人もいないものだから、有力といったところではたかが知れている。正式な形での認定は、恐らく光を吸収する器官が解明されてからということになるだろう。ちなみに排泄も大きな謎であったのだが、ばよばよが明け方近くに見せる赤い発光現象が、おそらくは彼らの排泄なのではないかと睨んでいる。

改めて考えてみると、本当に我々地球上の生物とは違っていると痛感させられる。事実、私の説明を聞く六人の態度は、表情の見えない現状においてさえ、啞然という言葉がピッタリと当てはまるほどに見えた。確かに、外から眺めるフロアライトほどの華は、このばよばよにはないかもしれない。だがそれと同じくらい、あるいはそれよりも遥かに高いレベルの驚愕が、この地表には転がっているのだ。ただ美しいだけの無機的な魅力ではない。どこか温かく、かつコミカ

ルなこの風景は、きつと忘れられない記憶となつて刷り込まれることと思う。少なくとも、私はそう信じたい。

「では、しばし自由にこの幻想的な風景と、ぱよぱよの愛らしい姿をお楽しみ下さい」

一段落して、バギーの側面に背中を預ける。大きく息を吐き、そのまま星空へ目を向けると、そこに見知らぬ光が見えた。

地上にある光は、この惑星において珍しくはない。どこで何色に光つていようと、それは十分に有り得る話だ。しかし空は、この惑星の空に輝く物体は限られている。あるとすれば、この観光客が乗ってきたであろう民間定期船と静止衛星上にいるステーション、あとはそこから発進可能なグラビティシャトルだけだ。しかし、そのどれも私の正面、東の低い空に見える筈はない。何かトラブルでもあったのなら話は別だが。

私は一応の確認は必要だろう判断し、バギーに乗り込んで通信回路を開く。

「ニコ、聞こえるか？」

『はいはい、こちら感度良好。どうしました、センセ？』

「定期船がどこにいるか、そこから確認できるか？」

『ビーコンの位置という話なら、ステーションと被ってますけど？』
予想通りの返答だ。つまり、定期船は突然の予定変更など行っていない。稀に気象条件が悪いなどの理由から、地表の輝きが見える位置へ移動することもあるが、頭上が見事に晴れ渡った状態では考えられることではない。定期船とステーションは、間違いなく私達の直上にある。

となると、先ほどの光は——と、また光った。隕石にしては妙だ。それはまるで皆既日食に見られる紅炎こうえんのように、もしくは太陽が沈んだ後に残された残照のように、何かを隠しているが故の名残にも見える。

「すまんニコ、悪いんだが『上』に繋いで確認してくれないか。本部の東方に何か飛行物体がないかどうか」

『了解です。少々お待ち下さいね』

理由は察してくれているのだろう。相変わらず話の通じる男だ。とはいえ、上にいる奴も同様に話が通じるとは限らない。だが、ステーション待機のローテーションを記憶から掘り返して並べているところで、コール音が鳴った。

「わかったか？」

『ビンゴですよ、センセ。どうやらステルス性の高いシャトルが一機、コッソリと下りてきていたようです。光学観測で何とか追いかけて……あ、今着陸したようです。距離は本部から東に五十キロ、そこからだと——』

「今から向かう！ ニコはお客さんを迎えに来てくれ！」

『え、今からですか？』

「頼んだぞ！」

一方的に通信を切り、ドアを開ける。

「皆さん、申し訳ありませんが、急な用事が入りましたので、私はしばらく失礼させていただきます。ですがどうかご心配なく。今別の者がこちらに向かっておりますので、その者が到着するまで、ごゆるり与此の惑星を堪能なさって下さい」

返答はない。いや、それを待つ余裕すらなかった。

私はドアを閉め、アクセルを踏み込む。いかに悪路を想定して作られたとはいえ、道路の一本も通っていない辺境の惑星だ。しかも周囲は緑や青の輝きを放つ大小様々な瓦礫に覆われている。今から駆けつけて、どの程度の意味があるのかはわからなかったが、それでもこのまま放置しておくことはできなかった。

ハンドルを握る手に力がこもり、車体が大きく跳ねることも構わずにアクセルを踏み続ける。

連中が何をしに来たのか、その理由は明白だ。そもそも、この星にある資源は、さほど珍しいものではない。蛍石も人工的に作るこ
とが出来る物質だ。そんな物を掻き集めたところで、何一つ旨味はないだろう。となれば、行き着く答えは一つしか思い当たらない。

ぱよばよである。

連合法により、固有種の移動は固く禁止されている。故にだからこそ成立する商売も存在していた。すなわち密猟だ。地球時代から絶え間なく続くこの悪癖は、舞台を宇宙に移したところで大差はない。その技術と規模が大きくなり、むしろ悪化したと言えるのかもしれない。ぱよばよは、見付かつて数年しか経っていない珍しい生物だ。似た様な生き物というだけでも、探すのは難しい。つまり、それだけ希少な存在であるとも言える。そしてもちろん、希少であればあるだけ売る側にとっての旨味は増し、それが故に投資もされる。まさしく、自然とすら思えるほど淀みのない流れだ。

だが、問題がないとも思えない。ぱよばよは見付かつて間もない生物、すなわちその生態はまだまだわからないことの方が多い。まともにわかっていることと言えば、フツ素の大気で生きていることと大きな群を成すこと、そして燐光を食べるらしいという程度だ。私とて、単体で飼育してみようなどとはまだ思えないほど、何もわかっていないのである。この惑星から連れ出して、それでも生かし続けられるだけの自信は、私にはない。あるいは、死体でも構わないからという発想なのかもしれない。

いずれにしても、ぱよばよにとって喜ばしい事態ではないだろう。あの生物が私の印象通りの存在であるとすれば、単にプルプル震えるだけのゼリー状生物ではない。もし仲間を奪われ、あるいは攻撃されるようなことになったら、人間という存在を敵と認識し、襲ってくるかもしれないのだ。ぱよばよは相手を憶える。しかもその相手が危険か安全かすら判断している節がある。

観光客が、その証拠だ。

当初、取材と称して訪れたマスコミの関係者がぱよばよの元を訪れた時、私の時と同じく手荒な歓迎を受けた。しかし何度か観光客を案内する内に、初対面の観光客に対しても大した反応を示さなくなってきたのだ。シールドスーツに身を包み、見た目にほとんど違いのない人間の違いを見分けるばかりか、どんな目的で訪れている

人間なのかすら見極めて対処しているように思えて、最近は少し恐ろしいと思いつつある。ぱよぱよの利口さは、あるいは我々が思っているよりもずっと高いレベルにあるのではないか、そんな風に感じることも少なくなかった。あの見た目に惑わされるべきではないのだ。

待て。私は一体何の心配をしているんだ。ここで案ずるべきはぱよぱよであって密猟者ではない。そもそも、どうしてもぱよぱよが反撃するかもしれないなんて考える必要があるのだ。彼らには牙もなければ爪もない。たくさんのぱよぱよに覆われて押し倒された時だって、私には傷一つなかった。

私は勢いに任せてアクセルを踏み込み、その途端にバギーは飛ぶような勢いで空中に投げ出される。幸いにも横転するようなことはなかったが、着地の瞬間にハンドル操作がブレてしまい、激しいスピンに突入する。慌ててハンドルを戻してブレーキを踏み込むものの時すでに遅し、巨大なフロアコーラルにフロントバンパーから思い切り突っ込んで、そのまま停止してしまった。前輪がおかしなハマり方でもしてしまったのか、後退しても動かない。何とかして発進できないものかとギヤを入れ替えるが、何かが引っ掛かって抜け出せなかった。

「くそっ！」

ハンドルを叩き、ドアを開けて外へと飛び出す。距離的にはずいぶん近付いている筈だ。あるいは走って行ける程度の距離かもしれない。そんな淡い期待を抱いて足を踏み出した瞬間、金属音を伴った銃声が響き渡る。あの特徴的な音は聞いたことがある。最近民間でも出回るようになったハンディコイルという複合銃だ。レールガンの原理を利用しているとか何とか聞いたが、さすがに詳しいことはわからない。いずれにしても、人間が武器を振るっていることだけは疑いようがない。そして、こんな場所に居る私以外の人間は、密猟者に他ならなかった。

「間に合うか？」

相手が武装していることに対する恐怖感は、驚くほどにない。この時の私は慌て過ぎていて、感覚がかなり麻痺していたのだろうと後の私は推測しているのだが、ともかく銃声を耳にした私の足は、鈍るどころか機敏さを増して動き始めていた。その先に待つ危険など、微塵も頭になかったのである。

いや、あるいは何かを予感していたのかもしれない。だからこそその光景は、驚愕ではなく不思議な納得感と共に脳裏へと焼き付いたのだろう。

森が開けた瞬間に、密猟者の物と思しきシャトルは発進しようとしていた。すでに仕事を終えたのか、それとも失敗しての退散であったのか、それはわからない。ただ、彼らは異様に慌てて発進しようとしていた。闇を照らす青や緑の輝きを浴びて、僅かな滑走の後に浮かび上がる。グラビティシャトルとは明らかに違う、ロケット系のシャトル艇だ。その速度は段違いであり、加速を始めれば瞬きする間にも見えなくなるほどの筈だった。

直進するかに見えたシャトルは、まるで弧を描くように右へと進路を変更する。それもその筈で、右翼には何かが絡み付き、その先は地面に繋ぎとめられていた。おそらく、鳥が首輪でもしていたらこんな風に見えたのだろうと思う。その鎖、あるいは数珠のようなモノが何であるのかは考えるまでもない。ぱよぱよ同士がくっついて、紐状になっているのだ。そして、加速度は維持したまま大きく回り込み、フローコーラルの巨木へと自ら突っ込んでいく。巨木は崩れ、シャトルは落下し、瓦礫に埋もれ、大きな山が出来上がる。

そして爆発した。

こうして、密猟に携わった五名全員の死をもって、この夜の惨事は終焉を迎えることとなったのである。

ばよ3 敵とばよ

事実、それは惨事と呼ぶに相応しい有様だった。五名の死亡が確認されたことはともかく、問題はその状況である。三人はシャトル内で発見された。瓦礫の下敷きになっていたせいか、遺体の損傷は当然ながら激しかったものの、その経緯に関しては私が見ていたこともあって明確だった。むしろ問題は残りの二人である。こちらはシャトルが着陸した場所で発見された。つまり、慌てて逃げ出した時にはすでに死んでいたと考えられる。その犯人が誰であるのかなど考えるまでもない。ばよばよが殺したのだ。しかも、その方法が酷い。二人の肉体の半分以上が溶かされていたのだ。反応性の高いフッ素化合物、恐らくはフッ化水素辺りで溶かされたのではないかと推測されるが、詳しい原因は我々の知るところではない。公安や警察が躍起になって調査していることだろう。

ともかく、前代未聞の出来事だ。密猟の最中に何かしらの事故が起こることは、恐らく有り得ない話ではあるまい。しかしこのような、まるで明確な殺意をもって殺されたかのような状況は、例のないことだろう。これはもしかすると、悪い影響が広がっていくかもしれないという危機感が、少なからず私の中に芽生えた。ばよばよは、決して好戦的な存在ではない。もしそうなら、私などは当の昔に溶けて無くなっている筈だ。そうなっていないのは、彼らが『良識』のようなものを有しているからのように思えてならない。悲しいかな、ばよばよという存在を知らねば馬鹿馬鹿しいの一言で片付けられそうな話である。しかし少なくとも、人を殺せるだけの能力を有していながら、今まで誰一人傷付けずにいたことも事実なのだ。この話が一人歩きして、あらぬ誤解をばよばよが招くのは避けたいと思う。だが同時に、私の中にも一抹の不安はあった。我々人間がそうであるように、ばよばよも人間に対して不信感を抱いたのではないかという危惧があったからだ。

それは、確かめる必要があった。

私は意を決し、見慣れた風景へと足を踏み出す。

ばよばよは、私を襲うことはなかった。あの密猟者と同じ外見をしている筈の私に、以前と変わらない様子で接してくれた。ばよばよは大丈夫、その思いは確信へと変わり、私の決意は固まった。この生物を、現時点で明確に擁護してやれるのは私をおいて他には居ない。しかも、あまり時間的な余裕はなかった。

その日の内に衛星軌道上にあるステーションへと昇った私は、再度訪れていた旅行会社の定期船へと乗り込み、そのまま連合政府の直轄地へと向かうことにした。多少強引ではあったが、唯一のツテでもあるマスコミを頼り、今回の事件のコメンテーターとして出演させてもらう。単純で盲目的な擁護は逆効果と判断し、私はことさらばよばよの正確な生態にこだわった。幾つかの放送局が特番を組んでおり、その依頼のことごとくに出て回った。とにかく真実を伝え、正確な判断を下して欲しいという、その願いを伝えたいがために。

そして一ヶ月の経過を待つて、連合政府が重い腰を持ち上げる。

しかしそれは、私の予測とは幾分……いや、かなり違っていた。話を聞きたいという要請に応じて出向いた、というより連行された先は、一目でそれとわかる程度の軍施設、広大な敷地の外側を高圧的な分厚い外壁によって遮断された閉鎖空間、軍事基地の一角に建てられた高層ビルの最上階であった。とりあえず、私のような中途半端な学者崩れが足を踏み入れることなど一生無いと断言できるほどの場所だ。少なくとも、表面上は私を歓迎しているようにも映ったし、事実そのつもりはあるのだろう。ただ、何もかもを見下すような眼差しに、友好的な態度などは微塵も見られなかった。

言うなればそう……招かれざる客、あるいは貴族の家に呼ばれた貧乏医師、などという印象が的確だろうか。いずれにせよ、用事が済めば叩き出されることは間違いないだろう。連中が必要なのは私ではなく、私の持っている『何か』であろうことは間違いない。無

論、それを簡単に渡してしまうほど迂闊ではないという自負はある。私がここにいる理由は、ぱよぱよという存在を危険から遠ざけ、穏やかな日常と研究を確保することにある。もし本当に必要なら、危ない橋もある程度は覚悟しなければならぬだろう。どの道、私に失うモノなど大して有りはしない。

「さて、早速だが博士にお聞きしたい」

柔らか過ぎるソファに落ち着きなく座った途端に、顔の前で手を組んだ顎鬚眼鏡の紳士が口火を切る。この環境と状況に若干浮き足立ってはいえるものの、正直言って驚きはなかった。彼らが知りたいのはぱよぱよの軍事利用が出来るか否かだろう。私は学者として、その考察を否定しなければならぬ。その上で、密猟やイメージの低下に待ったをかける必要があった。極めて困難な道程だ。決して簡単な話ではあるまい。

「何でしょう？」

「博士は、ぱよぱよに傷付けられたことは一度としてない、そう考えてよろしいのですよね？」

「はい……彼らは温厚な存在ですし、こちらが友好的に接する限り危害を加えることはないと考えます」

やや思惑の外れた質問に戸惑いながらも、正直に答えることとする。

「その判断を、あの丸い生き物がしている？」

「見た目と利口さが比例する訳ではありません。あのぱよぱよという生物は、記憶し学習し応用するだけの思考力を備えています。事実、密猟者と争って以降も私が危害を加えられることはありませんでした。彼らは同じ人間の中にも、自分に対して敵対してくる相手と友好的に接してくる相手がいることを知り、見極めるだけの利口さを備えているのです」

目の前の男、その髭の上にある口がニヤリと歪む。

「それは興味深い。ならば、貴方が一緒なら攻撃されずに済みそうですね」

「……それはどういう意味で？」

「そのままの意味ですよ、博士。実は先日、ウチのエリート部隊が
返り討ちに遭いましてね。貴重な兵士の命が一つ失われている。末
端にいた一匹を確保しようとした、ただそれだけの行為でこの有様
だ。許しがたい事実とは思いませんか？」

度し難い連中だと思う。人間を特別だと思うのは、ある意味にお
いて人間の本能だ。しかしそれでも、いやそういう人間であるから
こそ、真実に気付くことは出来るし気付かなければならない。ぱよ
ぱよの一匹と人間の一人は、それぞれの種において同等の価値を有
しているのだ。その命を安易に弄ぼうとすれば、返り討ちに遭うの
は道理であろう。まして相手はアメーバのような単細胞生物ではな
い。そう見えるだけの高度な知的生命体なのだ。もし彼らが人間と
いう種そのものに嫌悪感を抱くようになったら、研究どころの話で
はなくなってしまうだろう。あるいは、戦争のような事態に発展す
る可能性すら否定できない。

「彼らは、非常に仲間意識の強い生物です。常に群を成し、頻繁に
コミュニケーションを行っています。故に、そのたった一匹が彼ら
にとってどれほど大切なのか、我々の尺度で考えるのは尚早である
と考えます」

言葉を選び、慎重に話の方向性を整える。それにしても、すでに
軍が動き、特殊部隊が派遣されてぱよぱよの確保に動いていたとは
正直言つて意外だった。思っているよりも、話は良からぬ方向へと
傾いているのかもしれない。こちらの想定も、ある程度の修正が必
要になるだろう。

「しかし博士、あの生き物は密猟者を撃退する際、自らの同胞を多
数犠牲にしている。それほど末端の一匹を大事にしているとも思え
ないのだが？」

「それが人間の尺度だと申し上げているのです。彼らには彼らの価
値観があると考えます。恐らくはそうしなければ撃退できないと判
断した、苦渋の選択であつたと予測されます」

とはいえ、実のところ私も少なからず疑問には思っていた。一致団結して危機に立ち向かうと言えば聞こえは良い。しかしその役割には明確な差異があり、もつと言えば差別がある。恐らく中央付近で固まっているばよばよと末端に広がっているばよばよとは、何かしらの違いがあるのだろう。それが身分であるのか、それとも明確な役割であるのかはまだわからない。いずれにしても、感情すら感じられる彼らが迷いもなく命を散らす様は、どこか不自然にも映った。もしも人間に置き換えたなら、まずは蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い、上官の命令に渋々従って撃退行動を起こすというプロセスが自然な流れであろう。彼らにそのプロセスがないのか、あるいは有るものの見えないレベルなのか、今後の研究課題の一つになりそうではある。

「なるほど、要するにカミカゼという訳か。博士らしい発想だな」
私は内心で機嫌を損ねる。日系人というだけで特攻を連想されたのでは、さすがに命が幾つあっても足りるものではあるまい。そもそも、利己的な命が好んで死を選ぶような真似をしよう筈もない。実際に特攻で果てた者達だって、様々な葛藤の末の決断、あるいは不可抗力であつた筈だ。そう信じられる程度でなければ、生物学者などやっていない。

「とにかく、ばよばよは本来、決して好戦的な種ではありません。こちらが誠意を見せ、穏やかに接する限り、敵対行動など考えられないほど大人しい生物なのです。そのことを、まずはご理解下さい」「そうだな。その言葉を信じ、博士にも任務に参加してもらうことにしよう」

「任務？」

髭は大きく頷く。その濁った碧眼は鈍い輝きを放っている。フロライトの澄んだ輝きとは、あまりに対照的だ。腐った意志を介すると、これほどまでに輝きが汚れてしまうのだろうか。

「決まっているだろう。あの生き物、ばよばよの捕獲作戦だよ」

「ちょ……ちょっと待ってください！」

「博士がいれば攻撃されないのだろう？ 期待しているよ」

私はここに、暴走するかもしれない列車の出発を見合わせるようにと進言に来たつもりだった。だがそれは間違いだ。ここはもう列車の中で、すでに暴走を始めている。止めることは、もう出来ないだろう。

では、私に何ができる？

その答えが見付からないままに、私は第二の故郷、フローライトへの帰還を果たすのだった。

静かな一歩で、ゆっくりと間を詰める。

ぱよぱよの警戒は、ダイレクトに伝わってきた。いつもの私と違うことは、見ればすぐにでもわかるのだろう。そして、今回引き連れている客人が自分にとつて有り難くない存在であるうことも。そのためにか、ぱよぱよはいつにも増してフローコーラルの陰に身を寄せ合い、こちらの様子を観察しているように感じられた。

「おかしいことは考えるなよ？」

すぐ背後にいる隊長らしき人物が囁きを寄越す。私の役目はぱよぱよの攻撃を牽制するための盾となることだ。ぱよぱよが私を知り、私に対して攻撃をしないという前提の作戦である。もちろん、そんな役割を私自身が望もう筈はない。後方に見えるフローコーラルの天辺から、銃口で狙われた上での作戦だ。正直、虫唾が走る。

「それで、どういう手順でさらうつもりなんですか？」

「言う必要はない。お前は連中の動きを牽制することのみ集中しろ」

背後に控えている三人は、構えた銃器をそれぞれが担当する方向へと向けている。油断も隙も感じられない雰囲気だ。軍人としての力量は相当高いレベルにあるのだろう。だが、人としては感心できないし、敬意も払えない。もし私がぱよぱよの立場であったとしたら、話し合いの余地すらなく敵対すべしと判断することだろう。そ

しておそらく、ぱよぱよの判断は決している。

末端にいるぱよぱよが、激しく振動を開始した。仲間でのコミュニケーションを図るための、独特な緩急を伴った振動ではない。まるで叫んでいるような、喚いているような雰囲気振動だ。恐らくは警戒、あるいは威嚇のシグナルであろう。私が初めて見るぱよぱよの生態である。それはすなわち、私に対して常に友好的であったぱよぱよが、そうでなくなった瞬間を目撃しているということでもあった。

まるで大切な友を一人失ったような、そんな淋しさが溢れる。悔しいという思いと、悲しいという思い、その二つが混ざり合って膨らんでいくように感じられた。どうにかして逃げなければならぬ。この連中と決別しなければならぬ。そういう思いが強く激しくなっていく。

「お、おい、何なんだこれは！」

焦りの声が隊長から上がる。だが、答えられる者など誰一人居なかった。

各個の振動は激しさを増し、その範囲を広げ、森を揺るがすほどに大きくなる。まるで森そのものが怒り狂っているような、そんな圧迫感すらあった。地鳴りは地響きへと変じ、微かな振動が重なり合って足元すらおぼつかなくなる。ぱよぱよはこの森の、いやこの惑星の主であると実感させられるような、激しくも雄々しい猛りであった。

と、我々が二本足で立つことに集中していたところに、後方から情けない悲鳴が聞こえてくる。この方向と距離は間違いない。私を狙っていたであろうスナイパーのものだ。理由はわからないが、向こうで何かしらのアクシデントが起きた可能性は高い。

「デルタ、応答しろデルタ！」

隊長の呼びかけに返答はない。その状況を案じた三人が、同時に背後を、遙か後方に見えるはずのフローコールへと振り返った。その瞬間を待っていたかのように、視界の端で何かが跳ねる。それ

は、一番近いフロアコーラルの陰から躍り出たスカイブルーのばよばだった。まるで誘うように、ピヨピヨと跳ねている。これほど激しく動き回る様子を初めて見せられた私はしばし啞然としたものの、すぐに気を取り直してばよばよに駆け寄った。三人の軍人が気付いて銃口を持ち上げたと同時に、蛍石の陰へと身を隠すことに成功する。

複数の銃弾が、私の足跡を辿るように地面を抉った。

ばよばよとの絆を守ったということは、すなわち連合の軍人に対する裏切り行為であり、危機が続いていることに変わりはない。いや、むしろ人間としては選択を誤ったと考えるべき局面であろう。しかし、私は内心で深く安堵していた。これで嘘を吐く必要はない。ばよばよに対し、あの優しい生物に対し、誠実でいられることが嬉しかった。

ただ、私の人生はここで終わるかもしれない。

そう思った矢先、またもや悲鳴が上がった。

「馬鹿なっ。いつの間に！」

それはまるで、こちらの動きをあらかじめ察知していたかのようにすら思える迅速な包囲作戦であった。そう、気付けば私達は数え切れないくらいはよばよに囲まれていたのである。恐らくは、後方にいたスナイパーはすでに被害を受けているのだろう。あの悲鳴が演技でないのなら、不意打ちであったに違いない。

私という人質がいなくなったことに因るのだろう。残る三人を敵性と判断したばよばよ達は、一斉に襲いかかった。牙も爪も持たない透明饅頭が、四方八方から飛び込んでくる。

「応戦しろ！」

隊長の合図を皮切りにマシンガンが弾丸を撒き散らす。それは頭上から降ってくるような黄色い、さながらトパーズのようなばよばよ達を易々と貫き、穴だらけにした拳句破裂させる。しかし同時に、溢れた液体を被った三人のシールドスーツからは何やら焦げるような音が響き渡った。なるほど、あの黄色い個体が体内にフッ化水素

を宿しているのか。

「慌てるな！ コーティングは有効だ。すぐには溶けん！」

もしヘルメットを取ったなら口を開くことすらままならないような臭気の中で、隊長は気丈に二人の部下を鼓舞する。一方のばよばよは、トパーズイエローを前面に出しながら背後に薄紫——アメジストパープルを待機させている。高い所にはエメラルドグリーンのばよばよが見学するように待機しており、まるで戦況を監視しているかのように見えた。しかし、多勢に無勢とはいえ、フッ化水素が決定打にならない以上はばよばよの攻勢にも陰りがある。相手は武器を持ち、その武器は同胞の命を軽々と奪ってしまうほどの殺傷力を有していることは、すでにばよばよにもわかつている筈だ。

逃がした方が良い。そんな判断を頭の中で導き出した瞬間、三人の内の一人が耐え切れなくなったのか銃を乱射してばよばよの群に突っ込んでいく。幾つかのばよばよが犠牲となり、そこに道無き道をこしらえた。その道を突き進んで孤立した男に対し、今度はばよばよが反撃を開始する。ジリジリと迫る黄色いばよばよに銃口を向けた瞬間、その後ろに控えていた薄紫のばよばよが飛びついた。それは弾丸を受けても飛び散るようなことはなく、銃身や銃口に張り付いて動かなくなる。粘着力、あるいは柔軟性の高いばよばよなのだろう。ある程度色分けされていると踏んではいたが、まさかここまで明確な役割分担がなされているとは思ってもいなかった。薄紫はそのまま男の足元にも群がり、その場に固定させる。

そして直後、フローコーラルの巨木が彼に向かって倒れていった。その根元には青いばよばよが群がっている。力仕事は彼らの担当なのかもしれない。とにかく、鮮やかとすら思えるほどの手並みで一人を屠る。新しく出来上がった瓦礫はピクリとも動かず、彼の命は絶望的だ。二人の間は助けるどころか、啞然としたまま声を上げることすら出来ずにいる。しかし、いつまでも呆然と立ち尽くしていられるほどの余裕は、彼らに許されていなかった。

ばよばよが動き始め、残った二人ににじり寄っていく。

「ひ……退くぞ！」

有るだけの弾丸を撒き散らすような勢いで乱射しながら、二人はシャトルへと戻っていった。無用の犠牲を避けているのだらう。ぱよばよ達は道を譲るようにしてフローコーラルの陰へと引っ込んでいく。あの密猟者の一件から、ぱよばよも何かを学習しているのかもしれない。あるいはそれが、必要な争いを行うことに対する虚しさであつたりすれば、私としては喜ばしい限りだ。

いや、もうすでに、それこそ最初から気付いていたのではないだらうか。ぱよばよという存在の性質、ここに来てようやく見えてきた本質を考慮に入れば、むしろ気付いていない方が不自然であるようにも思える。私もまた、彼らを侮っていた一人の人間に過ぎなかつたということなのだらう。

「個にして全か……」

あるいは、全にして個と表現すべきだらうか。ぱよばよという生物は、この一つ一つの透明饅頭単体では不完全だ。むしろ、その一つ一つは大きな群である『ぱよばよ』の一部であると考えた方が的確であらうと思う。明確な役割分担や厳格な指揮系統は、蜂や蟻といった真社会性を有する生物に近いが、それ以上に——あるいはそれ以前に、ぱよばよという生物が群として一つの個体であると考えた方が、より正確な解釈に辿り着くように思えてならない。私は今まで、彼らが親密なコミュニケーションを行う生物だと認識してきたが、それは頭脳に当たる部分への情報伝達に過ぎないのかもしれない。あるいは、その繋がりこそが神経細胞の連なりと等しく、学習と思考を可能にしているとも考えられる。

そうだ。初めて別の場所ではぱよばよを観察した時、私は性格の違いから飛びついてこなかつたのではないかと推測した。しかし、ぱよばよが群で一つの情報を共有しているのであれば、それは初対面などではなく、すでに見知った相手が訪れただけの、極めて当然の反応を示したに過ぎないとわかる。一見すると仲間を無闇に犠牲にしているかのような彼らの戦術も、言うなれば手足の怪我を覚悟し

ながらの格闘であつたのだろう。その潔さすら含めて、実に天晴れな生物ではあるまいか。

私は今、改めてばよばよが好きになった。愛すべき存在であろうと認識した。と同時に、私が一方的に守っているつもりになつていた浅はかさを、恥ずかしく思う。その身勝手に軽はずみな行動は、むしろばよばよを窮地に追い込み、苦しめる結果となつてしまった。「すまん。本当に申し訳ない」

誠意を持つて、フローコーラルの森——ばよばよの中心が居るであろう方角へ向けて頭を下げる。今更という感は否めないが、それでも頭を下げずにはいらなかった。

そんな私の足元に、エメラルドグリーンのばよばよが擦り寄ってくる。あるいは彼らは、こちらの言葉を理解するどころか、精神すら読み解く感応性を有しているのかもしれない。そして今、その貴重で愛らしい生命体が、心無い人間という種によつて危機に晒されようとしているのだ。

何とかしたい、とは思ふ。連合軍が、特殊部隊の敗退一つで簡単に諦めるとも思えない。だが、裏切り者の私に出来ることなど、最早幾つも残されてはいないだろう。その数少ない何かを、私は考え始めることにした。

プルプルと勝利の歓喜に震える、たくさんのばよばよを見詰めながら。

ばよ4 ばよばよとばよ

私は何をすべきであるのか、その回答が見付からないままに、事態は急速に転落していった。これまで秘匿を続けていた軍部が、一転して特殊部隊の敗北とばよによる犠牲者を発表し、大統領に圧力をかけてきたのだ。この時の大統領は任期終了を丁度一年後に控えていたのだが、その人気はあまり芳しくなく、何とか功績が欲しいという思惑と軍部のゴリ押しが相乗効果を生み、このフロアイトへの熱核攻撃が決定する。本来、そう簡単に通るような決定とは思われなかったが、軍の威信や沽券といった言葉をダシにして強権は発動され、多くの反対意見を押し切って作戦は敢行されることとなった。

それにしても、このばよばよ達を核の炎で焼き払って、一体何をしようと言うのだろうか。そこにあるのは子供染みた意地と、歪んだ独占欲だけだ。手に入らないのなら、自分達の思うようにならないのなら滅してしまえという、あまりに浅はかな感情しか感じられない。それこそ、権力闘争の末に生じたある種の見せしめ、あるいは誇示といった情けない道理が背景にあるようにすら見えた。いや、人間社会での決定など、大半がそんなところだ。

いずれにせよこうなった以上、もう止めることはできない。それが例え血迷った末の判断や決定であつたとしても、最終的には民意を受けた代表の意志である。それが正しい行為であるのかどうかなど、大して意味のない問答であると言えるだろう。そしてもちろん、大統領と軍部以外の人類全てが反対しているのではない。ばよばよという人間ではない存在に同胞を殺されたことを怒り、制裁を加えるのは当然であると声高に主張する者も少なくはなかった。人間は所詮、近いか遠いかでしかモノの善悪を計ることが出来ない生物であるのかもしれない。

いつもと変わらない森を眺め、足元にいるばよばよを撫でる。そ

の瞬間、背後で蛍石の破片を巻き上げてバギーが停車した。

「やはりここでしたか」

ドアが開き、運転席からニコが顔を覗かせる。

「ニコ、まだ避難していなかったのか」

「それはこっちの台詞です。先生こそいつ避難するつもりなんですか？ そろそろ時間的にも限界です。核攻撃が中止されることはありませんよ」

「わかつているさ」

「わかつているなら、さつさと乗ってください。もうシャトルは一機しかないんです。あんまりゴネると置いて行きますよ？」

「そうしてくれ」

「またそんなことを……」

「私はねニコ、罪滅ぼしをせねばならない。あの核攻撃は、私が招き寄せたものだ。ばよばよは痛みを強いられ、下手をすれば死滅してしまうかもしれない。本当は連中の暴拳を止めたいところだが、それは無理な話だろう。だからせめて、連中を人殺しにしてやるのさ。核攻撃で人間を殺す、その行為が最後に行われたのは地球時代にまで遡る暴拳だ。たった一つの命だが、奴らに悪名を与えるには十分だろう」

「そついうの流行りませんよ？」

「流行に乗るようなら、ばよばよの相手などしていないさ」

「悲しむ人だっているでしょうに」

「喜ぶ輩も多かるうよ」

「やれやれ……」

大袈裟に溜め息を吐いて、ニコはそのままシートに埋もれる。彼の頑固さも筋金入りだ。ここで私が説得を始めたところで聞く筈はないだろうし、そもそも説得できる道理もないだろう。私は開きかけた口を閉じ、改めて森へと身体を向けた。

途端に森が、というよりばよ達がざわつき始める。まるで大きな力に押しのけられるような形ではよ達の集団が割れ、そう

やって作られた通路を一匹のばよばよが跳ねている。どうやらこちらに向かっているようだ。その背後に従うように何匹かのサファイアのようなばよばよが付き従っている。さながら、貴族か王様のパレードでも見ているかのような様相だ。

いや、案外外れてもいないのかもしれない。

そのばよばよは、鮮やかな青――懐かしい海の色をしていた。それもプラスチックのような鮮やかさだ。透明感はなく、明らかに他のばよばよとは違って見える。単なる予測に過ぎないが、彼らの王か、あるいはその子供というところだろうか。サイズが他のばよばよに比べて少し小さいところからすると、子供と考えるのが妥当なのかもしれない。

そのばよばよは、私の前でプルプルと震えた後、ピョンと飛び上がって胸の辺りに飛び込んできた。ドッジボールで捕球するかのよう慌てて抱きかかえると、今度はその周囲を固めていたサファイアブルーのばよばよ達が、ぐいぐいと私をバギーの方へと押しやっていく。その意図はあまりにも明確だが、私は認めたくなかった。

「待て。私は残る」

ばよばよは止まらない。私はついにバギーのドアに背中を預けるような格好になった。

「センセ、観念して乗ってください。ばよばよ達が望んでいるのは、先生を道連れにすることじゃないんだ。抱えているその子、その新しい命を託したいんですよ」

「ニコ、このばよばよが子供だとどうしてわかる？」

「何となくです」

そう言ってニカツと笑う。どうやら、ここは素直に敗北を認めるべき局面であるらしい。まったく、私はいつまで経っても他人の思いに鈍感でワガママな人間らしい。一人の人間としても、かつては夫としても、まだまだ至らないことが多過ぎるようだ。

「……わかった。負けたよ」

ドアを開け、コバルトブルーのばよばよを抱えてシートに座る。

もう迷いはない。ドアを閉めて窓の外を眺めると、まるで我々を激励するかのようにぱよぱよ達が跳ねていた。彼らが、これから先の出来事をわかっていない筈はない。それでも尚、祝福と共に送り出してくれる。

私も強くなるう。苦境にあつて輝きを放つ彼らのように。

最後のグラビティシャトルに乗って、私達は海を越えた。安全を第一に考えるなら大気圏を出るべきであろうが、そういう訳にはいかない事情を抱えている。その事情とは、言うまでもなくぱよぱよである。私とニコはどうやってどこへぱよぱよを運んだら良いのか思案した挙句、バギーに乗せたままシャトルに搭載し、大気圏を出ることなく別の大陸へ移動しようと考えた。というより、現状ではそれしかない。ぱよぱよはフツ素の大気があるこの惑星でしか生きられないのだ。他に選択の余地はなかった。

無論、熱核攻撃の影響を考慮すれば、確実に安全な策であるとは言い難い。しかしそれでも、私は希望を捨てるような真似は出来なかった。

ぱよぱよは、この惑星でもあの大陸にしか住んでいない生き物である。それを別の大陸に移し、そこで新たなコロニーを作ろうというのだ。生物学者としては、いささか問題のある軽率な行動と言えるかもしれない。この惑星にも、この惑星独特の生態系は築かれている。いない筈のぱよぱよが現れることによって、そのバランスが崩れてしまう可能性は十分にあった。いや、むしろそうならない方が不思議だろう。しかし人間とは、いや生物とは、元々主観的かつ自己中心的なものである。私はぱよぱよに消えてもらいたくない。本音を言えば、それだけのことだ。

「センセ、そろそろ始まるようですよ？」

モニターで外の様子、というよりはぱよの森の様子を監視していたニコが、こちらを振り返る。監視用のカメラを最大望遠に設定

した映像は、時折ノイズが走り抜けて輪郭も甘い。しかしそれでも肉眼では全く見えない遠方の映像を確実に捉えていた。さすがにこれだけ距離があれば、仮にミサイルがあゝの森を焼いてもここにまで直接の影響が届くことはないだろう。ただ、何が起るのかかわらないという事実を無視する訳にはいかない。再度端末を確認し、爪が大地を掴んでいるか、アンカーがしっかりと突き刺さっているかを確認する。どちらも今のところ問題はなさそうだ。

安堵してモニターに目を戻した瞬間、その映像に変化が起きる。

「動き出しましたね」

「ああ……」

頷きはするものの、私はただ驚くばかりだ。恐らく、相当に間の抜けた顔をしているであろうという自覚すらある。

ばよばよは、まるで巨大な人間が上半身を起こしたように、森の真ん中で重なり合って山を作っていた。それも単なる山ではない。二本の腕のようなモノを備えた巨大な山だ。フローコーラルの巨木は五十メートル近い高さのものもあるが、その倍近い高さを誇示しているのだから、どれだけのばよばよが結集しているのか想像すらできない。しかも驚いたことに、二本の腕のようなモノを伸び縮みさせ、弾丸のような何かを撃ち出してミサイルを迎撃し始めたのである。それはさながら、二つの巨大なパチンコを操る巨人のようであり、子供の頃に夢見た幻想的な世界の住人にしか見えなかった。モニター越しであったことも、そういった感覚を増長させた原因の一端であろう。

私はグッと、右の拳を握り締めた。

輪郭が甘いのでハッキリとはわからないが、射出しているのはばよばよの塊に見えた。正確な色まではわからなかったが、少なくとも黄色と薄紫が入っていることは間違いないであろう。命中するだけでも進路を変えられる可能性はあるが、この二種類がいればミサイルに取り付いて破壊することも出来る。そして、すでに何機かのミサイルは進路を大きく外れ、海に落ちているようだった。

「やるなあ、あと五発」

リーダーとモニターを交互に確認して、ニコは感心したように告げる。衛星軌道上から投下されるミサイルの具体的な数はわからないが、二桁に乗ることはないだろう。何発か落ちて残り五発なら、もう飛んでくることはあるまい。政府としても、失敗したからもう一度などと言える状態にはない筈だ。背水の陣なのは、ぱよぱよも政府も同様だろう。

無論、何の落ち度もないぱよが背水の陣を敷く道理など、微塵もないのだが。

ミサイルとの距離が縮まったことで、ぱよぱよの動きが変わる。二本の内の一本が射撃をやめ、その先端がグルグルと回り出した。その回っている先端を向かってきているミサイルに向け、その状態を維持したまま射出する。大きな、まるで回転するネットのような物体が固まって飛んでいる二発のミサイルを同時に巻き込み、そのまま渦を描くような軌道を描いて海に落ちた。これで片腕が無くなったような格好になったが、残るは三発である。そしてこの間に、相変わらず射出を続けていた弾丸の一つが命中し、その進路を大きく外していた。

「よし、これで残り二つ！」

ニコが握った拳を小さく振る。あと二発、ぱよぱよの勝利は目前だ。しかしミサイルは更に迫っている。最早爆発の影響を免れない距離だ。しかも慣性式の小型弾頭とはいえ、重力による加速によってトップスピードに乗っている。もはや迎撃を当てることすら困難な筈だ。もちろん、そのことをぱよぱよがわかっていない筈はない。最終局面を迎えた彼らは残った腕を最大限に伸ばし、その先端を勢い良く回し始めた。見た目はぱよぱよの扇風機である。先程飛ばした回転するネットに近いが、回転する部分が大きく、羽の数も多い。土台となる部分がよく折れないものだと思うが、全体に白くなっているように見えるところからして、硬化している可能性は高い。いずれにしても多彩な能力だ。

ただ、いくら伸ばしたとはいえ、爆発範囲を超えるほどの距離ではない。影響は無視出来ないながらも、可能な限り遠くで処理してしまおうという考えなのだろう。

ミサイルが近付く。回転数は更に上昇し、最後の砦を磐石なものにして待ち構えた。残る二発の核弾頭は、ほぼ同時に着弾するようなタイミングだ。つまり、同時に絡め取る必要がある。

「大丈夫。大丈夫だ……」

呟きの最中、画面上でミサイルが扇風機と被る。

が、一発は見事に絡め取ったものの、もう一発は掠るに止まり、ほとんど進路がずれることなくぱよぱよの山に迫る。すでに抵抗する力を失ったぱよぱよの山は、そこにただ佇むことしか出来ないでいる。そんな山の真ん中を貫いて、ミサイルはフーライトの大地へと突き刺さった。

途端に襲う衝撃と、遙かに遅れて到達する轟音。モニターの映像は乱れ、ぱよぱよの森がどうなったのか、全くわからなかった。しばしの沈黙と大きな緊張が辺りを支配し、何もかもを凍り付かせる。何も言えず、動くことも出来ず、呼吸をすることさえも躊躇われた。そして映像が戻った瞬間、握り締めていた拳から力が抜ける。

そこにはもう、荒れ果てた平野が残っているだけだった。

フローコーラルの森で、ぱよぱよは今日もゆったり過ごしている。新大陸に渡ったぱよぱよは順調だ。すでに繁殖を開始して、その数は二桁に乘ろうとしている。彼らの繁殖システムにはまだまだ謎も多いが、やはり蜂や蟻のように王、あるいは女王のような存在から生まれるのは間違いないようだ。ただ、その増え方は子供や卵を産むというよりも、分裂をするような形に近い。一定の期間をおいて、イボの様に盛り上がった表面がある日突然離脱し、小さな個体となるのである。

彼らの日常は極めて順調だ。このまま放っておいても心配はなさ

そうだが、預かった身としては心配でもあるし、何よりこんな観察の機会をみすみす逃す手はない。やはり私は、貪欲で自己中心的な研究者であつたようだ。

だが、そんな私であつたからこそ、訪れた結末というのも存在するのだろう。

「センサー！」

グラビティシャツルの着陸音がしたので、ニコの出現に驚くようなことはない。ただ、大きな手荷物を抱えているのは珍しい。主だった機材はバギーに積んだまま仮設居住設備へと運び込む仕様になっているので、手荷物ということはプライベートな物品だろう。

「酒か？」

「それもありますが、奥さんの手料理ですよ。冷たい旦那さんですね」

「ああ、なるほど」

その意外な大きさに納得する。彼女の料理は、いつも大ボリュームだ。経済的と言える側面もあるが、残してしまった挙句に捨てられることも少なくない。

「たまには帰ってあげた方がいいんじゃないですか？」

「帰っているだろ、たまには」

妻との復縁は、あのミサイル攻撃が終わって間もなくのことだ。テレビに露出していた私を見て近況を知り、ミサイル攻撃を受ける惑星に残ったと知って駆け付けたいらしい。今は爆発の被害を大して受けずに済んだドーム施設の居住区で小さな売店を営みながら、暇を見て『向こうの』ばよを見てもらっている。まだ多少の放射能汚染は残っているようだが、三度に渡る大規模な中和バクテリアの散布によって、汚染レベルは危険域を遥かに下回っている。フロコーラルの森はかなりの面積が失われたが、ばよよにとつて重要なのは昼間の陽光を避けるための日陰と、蛍石の発する燐光のみである。森そのものはゆっくりと回復していけば問題はなかった。むしろ意外という点で最も驚かされたのは、あの爆発でばよよ

が生き残っていたことだ。彼らの生態からして、王である個体が生きていれば復活が可能なことは間違いない。問題は、どうやってあの状況で王を生き残らせたのかということだ。一発とはいえ、広大な森の半分を吹き飛ばしたほどの威力である。実際、あの巨体は間違いなく爆発の範囲内にあった。にもかかわらず、活動の中心にいないければならない筈の王が生き残っていたのだ。あるいは生き残っていた内の一匹が王になったのだろうかとも思ったのだが、そうではなかった。

後になってシャトルに残っていた映像を解析してわかったのだが、あの巨体の天辺に当たる部分が、ミサイルの着弾直前に上空へと打ち上げられていたのである。さながら戦闘機の脱出システムのような様相だ。その後どうやって着地をしたのかについては不明だったが、いずれにしてもばよの王は生き残り、あの惨事の中を生き残った僅かな仲間と合流して、森へと戻ったのである。彼らも生きている。死ぬことなどは望んでいない。ただ、そのための最大限の努力が、私の想像を遥かに超えていただけの話だ。

ちなみに直接対決の相手である連合政府は、核攻撃すらもとに成功させられないとの叱責を受け、アツサリと退陣に追い込まれている。もうしばらくすれば、裁判という形で責任を取らされることになるだろう。無論、軍部も人事ではない。今回のスキャンダルは、別の勢力からすればまたとない好機でもあるのだから。

情けない話だが、人間というのはつくづく団結の下手糞な生き物であるのかもしれない。

「少しは気にした方がいいですよ。また別れたいんですか？」

「そう言われてもな……まあ、料理を作ってくれている内は大丈夫だろう。量が多過ぎるのは玉に瑕きずだがね」

「ああ、それなら大丈夫です。今日は泊まっていく予定ですから、余った分は全て僕が受け持ちますんで」

「それは助かる」

笑顔が交錯する。

と同時に、ぱよぱよ達が一斉に細かく震え出した。あるいは、彼らも笑ってくれているのかもしれない。もちろん、実際のところはわからない。一人の人間として、あるいは研究者として痛感する。我々とはよよとの関係は、まだまだ始まったばかりだ。

分かり合える日は、遙か遠い未来の話になるかもしれない。

だが、彼らが私を信じてくれたように、私も彼らを信じることが出来る。妻と再び分かり合えたように、私と他の人間だって信じ合うことが出来る。その先に待つ絆が、どうして絶望的な輝きを放っているように見えるのだろうか。

私が見ると、コバルトブルーの身体が応じるように震えた。

ここは惑星フローライト、蛍石とはよよの星である。

ちなみに青いフローライトの石言葉は、成功だそうだ。

ぱよ4 ぱよぱよとぱよぱよ（後書き）

長い話に付き合っただき、ありがとうございました。

この作品をもって、空想科学祭2009の参加作品は終了です。
大変でしたが、とにかく楽しめました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2657i/>

森のばよばよ

2010年10月8日14時41分発行